発行所
三池炭鑛労働組合
大牟田市不知火町
電話3033番
郵便 528 475 番
編集発行人　平島敏治
三鑛労組印刷工場

三鑛労組
紙芝居
機関

新賃金要求書を決定

基準外割増賃金の統一交渉で一波瀾

窓口打開に実力行使を指令？

中闘委員會では十月以降賃金要求書を次の如く決定した。然し連盟側は基準外割増賃金に關して各社從來の慣續なり、経理内容にも差異がある事なので各資本別で交渉されたいと、これが統一交渉には頑として應じない意向を表明しており、これに対し中闘としては基準内、基準外に拘らず賃金の性格に變りはないので飽くまでも統一して獲得するとの考え方に立つて強力に交渉、この問題を繞つて一波瀾免れない事態に立至った。推移如何では窓口打開の爲實力行使が早急指令される場合も豫想される。なお当初の十六社に麻生が加わり十七社を單位に交渉を持つ事となり連盟もこれを諒承した。

基本理念（健康で文化的な慰安ある生活を營み得る額）

憲法第十二条による永久の權利としての基本的人權及び第十二条に定める自由及び幸福追及に関する權利を尊重し、労働基準法に定める〝労働者が人たるに値する生活を營むための必要を充たすべき労働条件〟により要求賃金額を決定した。

〝人たるに値する生活〟とは少くとも〝健康で文化的な慰安ある生活〟である。

生活保護法に於ても生産無能力者に対する扶助の基本精神は憲法第二十五条に規定している〝すべての國民は健康で文化的な最低限度の生活を營む權利を有する〟から出たものである。

吾々は生産の第一線に立ち基幹産業の先頭に立つ生産有能力者である。従って〝健康で文化的な慰安ある生活〟を要求目標にすることは当然であろう。

賃金要求書

昭和二十七年十月一日以降昭和二十八年九月三十日までの鉱員賃金並に職員給与について左記の通り要求致します。

一、鉱員賃金
　①基準賃金＝本人給（定額給及時間給）、家族給
　②基準外賃金＝超過労働賃金、特殊労働賃金、不就業手当、その他
二、賃金額
三、基準賃金

イ、本人給　坑外夫一方当り平均五六〇円（税込）　坑内夫一方当り平均一、〇六〇円（税込）
ロ、家族給　扶養家族一人につき月額八〇〇円（税込）
ハ、基準外賃金割増率
　イ、早出残業　四四％
　ロ、深夜業　三五％
　ハ、公休出勤　六〇％
二、特殊公休出勤　二〇〇％
ホ、その他　実情に応じて各社で協定する

法定係員加給金

支給要領きまる

昭和二十六年十二月二十七日附本店労務部長通牒による法定係員処遇に関し三池では昭和二十六年下期分を左記要領により支給することに決定した。

一、支給対象者
法定係員の資格をもち昭和二十七年三月六年十月乃至昭和二十七年三月に至る間会社より任命され常時その作業に従事し支給当日在籍せる左記のものとする
①坑内　保安及発破係員兼務者
②〃　保安又は発破係員
③〃　火薬係員
④坑外　保安係員＝機械及電気
⑤〃　〃　発破係員（運搬）
二、財源算出方法
昭和二十六年十月乃至昭和二十七年三月各月末在籍における前記法定係員（除く火薬係員、坑外発破係員）延人員に夫々所定金額の六分の一を乗じた額とする。
（註）所定金額とは労務部長通牒通りとする
三、支給基準
坑内夫については単独別に左記点数制により算出した基準をとり支給する
九〇点以上　甲
七五点以上九〇点未満　乙
五五点以上七五点未満　丙

支給金額
①坑内夫
保安発破兼務のもの保安係員
発破係員別夫々の財源により展開した次の額を支給する
甲額＝保安発破兼務三、一〇〇円　保安係員二、五〇〇円　発破係員二、五〇〇円
乙額＝保安発破兼務二、八〇〇円　保安係員二、三〇〇円　発破係員二、三〇〇円
丙額＝保安発破兼務二、五〇〇円　保安係員二、一〇〇円　発破係員二、一〇〇円
②坑外保安係員（機械電気）は一律に一、八〇〇円支給する
③坑内火薬係員及坑外発破係員は一律に一、〇〇〇円支給する
四、月央の任免者はその月の稼業日半数以上の出勤者にその月の分を支給する
五、期央の任免者は月割計算にて支給する
六、臨時勤（病欠）者の取扱については当月の期間中はこれを支給しない
七、税金については八月分工賃と合算する
八、支給期間は期末毎に支払うものとする
八月廿日八月二十六日

三、労働時間
基準賃金中本人給に対応する労働時間については休憩時間を含む拘束八時間とする（含監視断続的業務従事者）
四、標準作業量
各社各山の現行標準作業量を拘束八時間の労働時間に対応する標準作業量に修正する
五、二十七年十月以降の物価上昇分については別途に要求する
六、その他
本要求書に記載以外の事項に関しては別途に協議決定する

職員給与
職員給与については鉱員賃金との適正なる均衡において鉱員賃金と同時に決定する

書記局便り

八月十二日　田川労組ニュース・カーそよかぜ来組
八月十四日　川端賃金中闘オルグとして帰山
八月十八日　西鉱運大会

感想文

總選挙と組合

三席　利雄

私達労働者階級は総評を中心にしたたかに、たやすく結論を出すことは出来ない。けれども、私達が全力を挙げて反対して来た破防法が、保守政党の政の為に議会を通過したこと、此の國会を通じて私達が「暴動」と叫んだ程実である。

此の國会を通じて私達が「暴動」と叫んだ程実である。破防法という悪法に対して、ストをはじめ、その他の種々の手段を取って闘争を続けて来た。勿論、労働組合が、此の様な闘争の手段として、ストライキに訴えたことについては、種々多くの意見が出ているが、今の段階では、この闘争が、効果があったとか、なかった方法をもって反対運動しても、それ切に感じたことは、民主主義の国では、私達大衆が、議会外で種々の方法をもって反対運動しても、それ程の効果はないことを、今度の闘争を通じて私達は、身をもって感じた。

保守政党の政の為に議会を通過したことは、民主主義の国会の原則である。だからこそ私達は選挙に対して全力を傾けなければならないわけだ。選挙の時は労働者の味方でない候補者に投票しておいてあとから、ガヤ〳〵不満をまきちらしても、これこそ一つしっかりと根強く残っているものがあった。

それは結婚の不安でもなく、家庭を持つ危惧でもなかった。現在の仕事に対する未練というか、もっとこの仕事を続けたい。そしてより大きなもの、より強いものにぶつかって、何もかも忘れて仕事そのものに没頭して見たかった。

病院へ出勤してからも、あの患者が自分の前に現れた瞬間の、その緩那のことばかりを考え続けた「〇〇さん」名を呼ばれて、自分の前に腰を下した昨日の患者の顔は、昨日より幾分明れやかになっている様だ。

「御容態は？」聞いてから、ぐっとうなずきをのむ。

「昨日注射をしてからも痛みが激しくて、夕方迄寝ていたんですが夜から次第に良くなって、今朝は痛みもぐっと減りました」

そう答える患者の言葉を聞き乍ら、深見女医は何度もうなづいていた。

遠くの方からじっと患者を見守って、然もその緩那に、大きな喜びと生甲斐を感じるのは、到底医者でなければ味えない尊いものなのだ。

レントゲンと手術の必要を訴ねる患者に

「ペニシリンの注射をもう一本打って戴きますから、今日一日様子を見てみましょう」こう答えて「それに上顎の手術が済んで居りますので、こゝの手術は必要ないでしょう。病みが続くようでしたら一度レントゲンを撮って見ても、けど、まず大丈夫でしょう。手術後の洗滌は或る期間必要ですし、急ると、手術しても何にもならない場合がありますので、毎日洗滌にお出でなさい」とつけ加えた。

×

翌日は、更に病みも減ったという。然し前頭洞よりの排膿は同じだった。

しばらくの間、洗滌と、テラジアジンの注射を続けてみようと女医は思った。

二、三日すると、すっかり病みも去ったと患者はいった。

排膿も少しづつ減って来た。

―もう大丈夫―

女医は、この善性の患者が、日増しに良くなっていくのが、自分のことの様に嬉しかった。

他の医師が全然気付かないでいた為に、この患者は苦しまないでいい苦しみを味っていた。手術後に、徹底した治療を施していたならば、この患者の病気はもっと煩日に治っていただろうと女医は感った。

××医師が知らないでいたのを自分が知った悦びよりも、他の医師が見過した為に、一人の人間が苦しんだという事実が、女医には自分の責任の様に感じられるのだった。

求めても、つき進めても、なお はかり知れぬ医学の道―

自分が学び、経験した何年かの歳月は、なお遠く、険しく続いているのだ。女医はそう思った。

×

女塾時代の級友Sから手紙が来たのは、二、三日前の事だった。

……お知らせしなかったけど、先月の八日、男の子を分娩、お宮詣はつと回想から覚めた。もうすぐ治療の時間だ。医学書をパタンと反故の上に置いて、坊やの寝顔を見乍ら、この手紙を読めてます。現在の私は幸福感でいっぱいです……手紙の終りに書かれているのを読んで、彼女は

「お早よう御座居ます」

看護婦達が挨拶するのへ、軽く会釈しながら、抱えてる医学書を机の上に置いて、椅子に腰をおろした女医は、一瞬かに窓外の景色に目をやった。

美しく殺った緑、立並んだ社宅の白壁に照り返す初夏の日射しが目に痛い様だ。何処かで鳴く蝉の声も聞えて来る。医学書を開いていた女医は、何時しか学生時代の事を思い浮べてゐた。

女子医専に於ける彼女は、勉強も人一倍熱心だった。下宿へ帰ってからも、夜おそくまで医学書と取組んだ。

「立派な医者になろう」そう思う事だけが彼女の全部だった。

臨床講義の際にも、自分から進んでメスを持ち、実際に当った。本当に苦しい、然し、只一筋に生きる事の出来る、楽しい日々であった。

教壇に於けるY教授の顔が浮ぶ。メスを手に、臨床講義を続ける耳博士の一点に凝結した鋭い目と、メスを持つ手許を、喰入る様に見つめている自分―同じく、ぐっと取囲んでいる級友の顔、顔―耳もいる。Tも、Sも。

×

女塾時代の級友Sから手紙が来たのは、二、三日前の事だった。

……お知らせしなかったけど、先月の八日、男の子を分娩、お宮詣はつと回想から覚めた。もうすぐ治療の時間だ。医学書をパタンと反故の上に置いて、坊やの寝顔を見乍ら、この手紙を読めてます。現在の私は幸福感でいっぱいです……手紙の終りに書かれているのを読んで、彼女は

「それは結婚の不安でもなく、家庭を持つ危惧でもなかった。現在の仕事に対する未練というか、もっとこの仕事を続けたい。そしてより大きなもの、より強いものにぶつかって、何もかも忘れて仕事そのものに没頭して見たかった。頭は益々冴えて、容易に眠れない。時計のセコンドの音だけがいやにはっきりと聞えて、夏のみじか夜の静けさだけが感じられる」

×

朝起きると、すぐ昨日のことが彼女の頭に浮んだ。

病院へ出勤してからも、あの患者が自分の前に現れた瞬間の、その緩那のことばかりを考え続けた「〇〇さん」名を呼ばれて、自分の前に腰を下した昨日の患者の顔は、昨日より幾分明れやかになっている様だ。

「御容態は？」開いてから、ぐっとうなずきをのむ。

「昨日注射をしてからも痛みが激しくて、夕方迄寝ていたんですが夜から次第に良くなって、今朝は痛みもぐっと減りました」

そう答える患者の言葉を聞き乍ら、深見女医は何度もうなづいていた。

遠くの方からじっと患者を見守って、然もその緩那に、大きな喜びと生甲斐を感じるのは、到底医者でなければ味えない尊いものなのだ。

レントゲンと手術の必要を訴ねる患者に

「ペニシリンの注射をもう一本打って戴きますから、今日一日様子を見てみましょう」こう答えて

「それに上顎の手術が済んで居りますので、こゝの手術は必要ないでしょう。病みが続くようでしたら一度レントゲンを撮って見ても、けど、まず大丈夫でしょう。手術後の洗滌は或る期間必要ですし、急ると、手術しても何にもならない場合がありますので、毎日洗滌にお出でなさい」とつけ加えた。

×

翌日は、更に病みも減ったという。然し前頭洞よりの排膿は同じだった。

しばらくの間、洗滌と、テラジアジンの注射を続けてみようと女医は思った。

二、三日すると、すっかり病みも去ったと患者はいった。

排膿も少しづつ減って来た。

―もう大丈夫―

女医は、この善性の患者が、日増しに良くなっていくのが、自分のことの様に嬉しかった。

他の医師が全然気付かないでいた為に、この患者は苦しまないでいい苦しみを味っていた。手術後に、徹底した治療を施していたならば、この患者の病気はもっと煩日に治っていただろうと女医は感った。

××医師が知らないでいたのを自分が知った悦びよりも、他の医師が見過した為に、一人の人間が苦しんだという事実が、女医には自分の責任の様に感じられるのだった。

求めても、つき進めても、なお はかり知れぬ医学の道―

自分が学び、経験した何年かの歳月は、なお遠く、険しく続いているのだ。女医はそう思った。

そして、もっと〳〵多くの人達の苦しみを除き、この鉱山に働く人達を、その家族を、少しでも幸福にしてやりたいとも思うのだった。

感想文

總選挙と組合

三席　利雄

私達労働者階級は総評を中心にしたたかに、たやすく結論を出すことは出来ない。けれども、私達が全力を挙げて反対して来た破防法が、保守政党の政の為に議会を通過したこと、此の國会を通じて私達が「暴動」と叫んだ程実である。

此の國会を通じて私達が「暴動」と叫んだ程実である。破防法という悪法に対して、ストをはじめ、その他の種々の手段を取って闘争を続けて来た。勿論、労働組合が、此の様な闘争の手段として、ストライキに訴えたことについては、種々多くの意見が出ているが、今の段階では、この闘争が、効果があったとか、なかった方法をもって反対運動しても、それ切に感じたことは、民主主義の国では、私達大衆が、議会外で種々の方法をもって反対運動しても、それ程の効果はないことを、今度の闘争を通じて私達は、身をもって感じた。

保守政党の政の為に議会を通過したこと、此の國会を通じて私達が「暴動」と叫んだ程実である。

勿論、このことが理解されていても、私達がバラ〳〵で思い勝手に投票しても決して保守政党には勝つことが出来ない。私達は選挙に対して全力を傾けなければならないわけだ。選挙の時は労働者の味方でない候補者に投票しておいてあとから、ガヤ〳〵不満をまきちらしても、これこそ一つしっかりと根強く残っているものがあった。

それは結婚の不安でもなく、家庭を持つ危惧でもなかった。現在の仕事に対する未練というか、もっとこの仕事を続けたい。そしてより大きなもの、より強いものにぶつかって、何もかも忘れて

「それは結婚の不安でもなく、家庭を持つ危惧でもなかった。現在の仕事に対する未練というか、もっとこの仕事を続けたい。そしてより大きなもの、より強いものにぶつかって、何もかも忘れて

感想文「總改選と組合」

選挙後の感想に就て（2）

中島　知英

三席の高田君の話は先に指摘したこの系列の中では最も簡明に整理された。

「対策」面から言われたものだがされていたもの。政治とか選挙とかいう話は

「選挙の祭り」だ「感がな行いだ」とない、或は何来を支持しない、何来を支持するとか、亦組合からの推薦を推薦することについて積極的な決定をなし、とかつた人々なまで、このことを説得するの努力がなされなければならない。

これは、たやすいやうであるけれども、非常に困難なことであるしかし、この家族への運動を達成しなければならない。

組合員は皆だけでなく、家族の一人なり、母となって、自分だけ一寸寝しかった。

女塾時代の友人の姉とが、嫁となって、自分だけ一人ぼっちと取残されてゐる感じだった。

父からも二、三回、結婚の話もあったけれど、相手を考えるより単に捨てる気になれず、こゝ一年ばかり過して来た。

だが、この頃になって、あと二十月もすると、二十八になるという焦も 何故か悪ろしかった。

今日一日が永遠の運命だと思うと、時折は、病院を辞めて結婚し、家庭を持つ楽しい空想を抱かぬでもなかったが、心の片隅には何か一つしっかりと根強く残っているものがあった。

それは結婚の不安でもなく、家庭を持つ危惧でもなかった。現在の仕事に対する未練というか、もっとこの仕事を続けたい。そしてより大きなもの、より強いものにぶつかって、何もかも忘れて

「それは結婚の不安でもなく、家庭を持つ危惧でもなかった。現在の仕事に対する未練というか、もっとこの仕事を続けたい。そしてより大きなもの、より強いものにぶつかって、何もかも忘れて

創作　「女医」　吉田　稔

同じ三井鉱山の附属病院であるく性質だったし、三人の看護婦達に関しても際ひたなく働いて呉れた。

×

「お早よう御座居ます」

看護婦達が挨拶するのへ、軽く会釈しながら、抱えてる医学書を机の上に置いて、椅子に腰をおろした女医は、一瞬かに窓外の景色に目をやった。

美しく殺った緑、立並んだ社宅の白壁に照り返す初夏の日射しが目に痛い様だ。何処かで鳴く蝉の声も聞えて来る。医学書を開いていた女医は、何時しか学生時代の事を思い浮べてゐた。

女子医専に於ける彼女は、勉強も人一倍熱心だった。下宿へ帰ってからも、夜おそくまで医学書と取組んだ。

「立派な医者になろう」そう思う事だけが彼女の全部だった。

臨床講義の際にも、自分から進んでメスを持ち、実際に当った。本当に苦しい、然し、只一筋に生きる事の出来る、楽しい日々であった。

教壇に於けるY教授の顔が浮ぶ。メスを手に、臨床講義を続ける耳博士の一点に凝結した鋭い目と、メスを持つ手許を、喰入る様に見つめている自分―同じく、ぐっと取囲んでいる級友の顔、顔―耳もいる。Tも、Sも。

×

女塾時代の級友Sから手紙が来たのは、二、三日前の事だった。

……お知らせしなかったけど、先月の八日、男の子を分娩、お宮詣はつと回想から覚めた。もうすぐ治療の時間だ。医学書をパタンと反故の上に置いて、坊やの寝顔を見乍ら、この手紙を読めてます。現在の私は幸福感でいっぱいです……手紙の終りに書かれているのを読んで、彼女は

「それは結婚の不安でもなく、家庭を持つ危惧でもなかった。現在の仕事に対する未練というか、もっとこの仕事を続けたい。そしてより大きなもの、より強いものにぶつかって、何もかも忘れて

活発な口火

三川支部緑ヶ丘地域分会

三川支部緑ヶ丘地域分会が発足したのが今年の正月、八町内四千六百人の大世帯を擁して最初は身動きも容易ではなかったようだが酒井会長初め幹部の献身的な努力と会員の協力が漸次実を結び、殊にはその後七分会に分割、運合会組織を取つてからは一層チーム・ワークの味を増し、その活動も目立つて活発さを加えて来た。以下最近の動きを二、三御紹介する。

力をあわせて

特定局設置に猛運動

緑ヶ丘社宅は戸数約千七百、人口一万にして八千余り、一寸した地方小都市並みの規模をもっていながら郵便局はといえば荒尾市経営の簡易郵便局が一つあるだけ、集配区域外なので郵便が遅れるのは勿論郵報などの場合別便配達料百廿円を余分に払わなければならず、何かと非常に不便なので前々からせ為氏はじめ幹部が関係当局に御百度ふんで意向打診につとめた結果、郵便局の設置は議会の承認を経て、一局が新設されると日本全国の郵便局の名簿からして更新しなければならず、相当厄介な問題ではあるが、運動如何では勿論不可能ではなく、殊に熊本郵政局なり荒尾市当局としても特定局設置の必要性は十分認めているところなので、これに気を得て此程から大々的な署名運動に乗り出し大体院の雰囲気も酌つて来た。深見女医に目をやった。

美しく殺った緑、立並んだ社宅の白壁に照り返す初夏の日射しが目に痛い様だ。何処かで鳴く蝉の声も聞えて来る。医学書を開いていた女医は、何時しか学生時代の事を思い浮べてゐた。

女子医専に於ける彼女は、勉強も人一倍熱心だった。下宿へ帰ってからも、夜おそくまで医学書と取組んだ。

「立派な医者になろう」そう思う事だけが彼女の全部だった。

臨床講義の際にも、自分から進んでメスを持ち、実際に当った。本当に苦しい、然し、只一筋に生きる事の出来る、楽しい日々であった。

教壇に於けるY教授の顔が浮ぶ。メスを手に、臨床講義を続ける耳博士の一点に凝結した鋭い目と、メスを持つ手許を、喰入る様に見つめている自分―同じく、ぐっと取囲んでいる級友の顔、顔―耳もいる。Tも、Sも。

×

女塾時代の級友Sから手紙が来たのは、二、三日前の事だった。

……お知らせしなかったけど、先月の八日、男の子を分娩、お宮詣はつと回想から覚めた。もうすぐ治療の時間だ。医学書をパタンと反故の上に置いて、坊やの寝顔を見乍ら、この手紙を読めてます。現在の私は幸福感でいっぱいです……手紙の終りに書かれているのを読んで、彼女は

「それは結婚の不安でもなく、家庭を持つ危惧でもなかった。現在の仕事に対する未練というか、もっとこの仕事を続けたい。そしてより大きなもの、より強いものにぶつかって、何もかも忘れて

嘱託員の増員確定的

交渉順調、八月末に改選

何時たづねても居ない。婦人会なのより緑ヶ丘集会所に於て市側より打合会を、去る十一日前九時より展開した次の顔を支給する

清水所長外担当係二名、社宅事務所員一名、地域分会より坂井部長外婦人三名に

甲額＝保安発破兼務三、一〇〇円　保安係員二、五〇〇円　発破係員二、五〇〇円

乙額＝保安発破兼務二、八〇〇円　保安係員二、三〇〇円　発破係員二、三〇〇円

丙額＝保安発破兼務二、五〇〇円　保安係員二、一〇〇円　発破係員二、一〇〇円

②坑外保安係員（機械電気）は一律に一、八〇〇円支給する

③坑内火薬係員及坑外発破係員は一律に一、〇〇〇円支給する

四、月央の任免者はその月の稼業日半数以上の出勤者にその月の分を支給する

五、期央の任免者は月割計算にて支給する

六、臨時勤（病欠）者の取扱については当月の期間中はこれを支給しない

七、税金については八月分工賃と合算する

八、支給期間は期末毎に支払うものとする

八月八日八月二十六日

編集後記

前進

敬造九月号のぼう頭「日本人の自由」と題する一文の中に、イギリス思想界の長老コールの言葉を引用した清水幾太郎氏の次の様な一節がある。

さてこのコールは最近のある講演の中で、次のようなことを言っております。即ち「現在、世界的規模において、資本主義は力によってでなければ守ることが出来ないところまで来ている、もはや、資本主義はファシズムとしてでなければ存立することはできない」

ということを言っています。彼は淡々と云っている。おそらく向十年か彼の生涯を通じて、このことを言い続けてきたのでしょう。日本の場合にしても、民主々義とは体裁のいい看板にはなっているものの、その陰破防法の成立を通じて、民主々義の生命であるもろもろの自由が失はれて行く、ファシズムになってゆく。日本の資本主義もまた力でもって守らなければ存立できないところに追い込まれているからであります。破防法は民主々義と資本主義とが両立し得ないことを立証していると申さねばなりますまい。

二

右の引用にまつまでもなく資本主義経済の矛盾を如何に克服するかの問題は、本場であるアメリカを先頭にさんざん頭を悩ましている様であるが、特に第二次世界大戦この方、従来資本主義国のドル圏であった各植民地には民族独立の運動が遠原の火の様に燃え続けて、ロシア、中共を中心とする反資本主義国の勢力が強化され、まして労働階級の力が増大して来た事は、常に不景気の尻拭い役に廻されていた被搾取階級の抵抗となって現れる結果となっているのである。

指摘される迄もなく言葉が日本に於ても此の世界的傾向と共に例外でない様に、東洋諸島、さては中国印度に至るまで領土、植民地又は最大の貿易先を失った今日、なお日本の資本を維持する為には力づくでも労働者にしわよせをする処であり、従って急速な資本蓄積化と労働陣営の弱体化工作が打たれて来た所以でもある。

日本経営者団体連盟、日本鉱業連盟等われわれに身近な、又その統制の強さ故に一度ならず苦杯をなめさせられた資本陣営の組織については今さら述べる必要もあるまい。

三

斯る資本主義再建一辺倒の政策は当然のことながら強大独占資本への移行となって現われ、御家騒の法律改正が行はれ、人間の追放解除のみか追放社名追放マークと共に独占資本は大手を振って復活して来たのである。

言々の身近に日毎まき散されている賃金遅払、引下げ、首切り等中小資本の小族山を中心にした労働争議は大資本中心のこの一段階としてやがては大手筋へ伸びて来る必然の運命を抱いているのに注目すべきであろう。

四

今回十月以降賃金の闘争に当って炭労が十七社交渉という、未だかつてなかった長大な戦線を決議したのも最近以上の様な時勢の然らしむる処に他ならない。所謂「総資本対総労働」といはれる階級闘争の機相が、いやおうなく現実に具体化されたと見るべきであろう。

中小炭鉱の労働者が相次いで職を奪はれ、低賃金を押し付けられ、極端な場合には大資本の犠牲となって経営者も共産統のうき目にあっていることは最近とみに其の例を増加しつゝある処である。今でさえ手に負えない失業者が今後は更に増加の一途を辿ることを思えば、現在職にあり付いている吾々の地位自体が日毎に其の安定を失って行くと共に、失業したくないばかりに低賃金、高能率で辛抱する労働者層が増加することは、それだけ良い条件で働らいている者達のレベルを下げる原因になっている。

炭労の十七社交渉が成功するか否かは、総評の指導の如何に係っている。

感想文「総改選と組合」

選挙後の感想に就て（2）

中島　知英

三席の高田君の話は先に指摘したこの系列の中では最も簡明に整理された。

「対策」面から言われたものだがされていたもの。政治とか選挙とかいう話は

「選挙の祭り」だ「感がな行いだ」とない、或は何来を支持しない、何来を支持するとか、亦組合からの推薦を推薦することについて積極的な決定をなし、とかつた人々なまで、このことを説得するの努力がなされなければならない。

これは、たやすいやうであるけれども、非常に困難なことであるしかし、この家族への運動を達成しなければならない。

組合員は皆だけでなく、家族の一人なり、母となって、自分だけ一寸寝しかった。

女塾時代の友人の姉とが、嫁となって、自分だけ一人ぼっちと取残されてゐる感じだった。

父からも二、三回、結婚の話もあったけれど、相手を考えるより単に捨てる気になれず、こゝ一年ばかり過して来た。

だが、この頃になって、あと二十月もすると、二十八になるという焦も 何故か悪ろしかった。

今日一日が永遠の運命だと思うと、時折は、病院を辞めて結婚し、家庭を持つ楽しい空想を抱かぬでもなかったが、心の片隅には何か一つしっかりと根強く残っているものがあった。

それは結婚の不安でもなく、家庭を持つ危惧でもなかった。現在の仕事に対する未練というか、もっとこの仕事を続けたい。そしてより大きなもの、より強いものにぶつかって、何もかも忘れて

第二期
労働問題講事
1952年9月　1953年2月

見本内容
労働者の経済学……高橋　正雄
日本の資本主義……副田　満輝
経営論・賃金論……馬場　克三
戦後の経済……東水与一郎
労働法……林　廸広
労働運動史……河野　広
労働組合の組織と運営……奥田　八二
社会保障……玉木　正義
学習の手引……田中　兼人
◇6回分で五百円（10回分納）
福岡県労働部
受付は各支部教宣部で

ぽいんと

言が党に有利な公明選挙をうち出した　自由党大臣諸公が次から次へと辞国入り

記者を汽車に呼んで一席これは事前運動ちゃないか

△　△　△

歴史はくりかえす

平家ちゃなくては人ちゃなし

自由党ちゃなくては人ちゃない

他党は事前運動も違反ちゃない

△　△　△

金持ちは米を　貧乏人は麦を食え

中小企業はつぶれるのは当り前だ

今度の総選挙で打ち破れ

ワンマン自由党何ものぞ

△　△　△

元A級戦犯重光を首領とする改進党が

憲法改正を叫んで出馬して来た

再軍備コースを辿る改進党が

ハレンチ極る大馬鹿者

夫や息子は殺したくない

△　△　△

裏面は労働者の味方

内面は保守協力の右派社会党よ

労闘ストに水をかけ

労働大衆はそんな馬鹿ではない

△　△　△

家へ帰ってからも、彼女は、今日来た慈性前頭洞の患者のことばかりを考えて、床に寝入ってからも妙に眠れなかった。

あの病症ならば、上顎手術の際、相当ひどかったに違いない。

顔面の不感症を訴えたのは、手術の際の局部注射のコカインの故だから心配はない。縫合も完全に行われていたので、手術後の手落ちというものは無当らない。たゞ××医師が、前頭洞を金頭に置かなかったということだ。

手術するといっても、前頭洞は上顎の手術よりも容易だ。それにあの程度の膿汁では、手術まさする必要はなかったろう。今日のペニシリンの注射が、あの病症を何処まで阻止出来るか？明日、あの患者が何と訴えて来るか？治療してメスを持った時の緩な激しい興奮だった。夜の明けるのが、待ち遠しかった。頭は益々冴えて、容易に眠れない。時計のセコンドの音だけがいやにはっきりと聞えて、夏のみじか夜の静けさだけが感じられる。

×

朝起きると、すぐ昨日のことが彼女の頭に浮んだ。

病院へ出勤してからも、あの患者が自分の前に現れた瞬間の、その緩那のことばかりを考え続けた「〇〇さん」名を呼ばれて、自分の前に腰を下した昨日の患者の顔は、昨日より幾分明れやかになっている様だ。

「御容態は？」開いてから、ぐっとうなずきをのむ。

「昨日注射をしてからも痛みが激しくて、夕方迄寝ていたんですが夜から次第に良くなって、今朝は痛みもぐっと減りました」

そう答える患者の言葉を聞き乍ら、深見女医は何度もうなづいていた。

遠くの方からじっと患者を見守って、然もその緩那に、大きな喜びと生甲斐を感じるのは、到底医者でなければ味えない尊いものなのだ。

レントゲンと手術の必要を訴ねる患者に

「ペニシリンの注射をもう一本打って戴きますから、今日一日様子を見てみましょう」こう答えて